それでも、言葉を ⑵

鷲田 清一

（筆者は、絶えず言葉を発する傾向がＳＮＳの普及でエスカレートし、言葉を受け取る側も言葉をのみ込むことなく反射的に言葉を返してしまっていると述べています。）

7 私たちは、言葉が音として届けば、あるいは文字として送られれば、言葉が伝わったかのような錯覚に陥りやすい。「わかり合う」「通じ合う」「触れ合う」、そんな安易な言葉の洪水が、わかってくれて当然という甘えを生み、さらに言葉を通じにくくさせている。理解してほしいという気持ちが高じてくると、理解してもらえないときにはその反動で、「キレる」「ムカつく」といった荒々しい言葉が投げつけられる。

8 しかし、①言葉は単なるメッセージの媒体なのではない。言葉には言いたいこと（言葉の意味）だけでなく、言いたいという気持ちも含まれている。②それは「言葉の肌理」となって現れる。対話の場でふと何かが腑に落ちるとき、私たちは語りの整合性や合理的根拠によってではなく、むしろその感触や肌理、口調や声によって、相手が本当に言いたい何かに気づかされることが多い。言葉の背景にある体温や手応えに、どれだけ想像力を向けられるかなのだろう。それがないと、言葉の意味だけをむき出しのままぶつけ合うだけになる。

9 わかりやすさや反応の速さが求められる時代、大量の言葉を前に、じっくり言葉と向き合い思考する時間も、吟味して言葉を選ぶ心の余裕もなくなっている。社会に、隙間という意味での「あそび」がなくなってきている。短絡的な言葉で片づけようとして言葉が先鋭化し、一気に攻撃的になる。法令を遵守しているかいないか、ファクト（事実）かフェイク（でっちあげ）か、ラブ（愛）かヘイト（憎悪）か、大声か沈黙かというふうに、両極端に分かれ、③グレイな対応を許さない、そうした社会の余裕のなさが、言葉の二極化の背後にあるように思われてならない。

（7～9は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「言葉は単なるメッセージの媒体なのではない」とあるが、ここで述べられていることとして適当なものを、この後の内容をふまえて選びなさい。

ア　言葉は単に音や文字として送られるだけのものではなく、さまざまなメディアを通して送られるものだということ。
イ　言葉はその言葉が表す意味を伝えるだけのものではなく、何かを言いたいという気持ちも含んだものだということ。
ウ　言葉はいつでもメッセージを伝達することができるというわけではなく、伝わらないこともあるのだということ。
エ　言葉は単純な情報を表すだけではなく、思考力が必要な意味や気持ちを言葉にすることもあるのだということ。

〔　　〕

(2) ――線②「それは『言葉の肌理』となって現れる」とあるが、ここで述べられている内容に合うものを選びなさい。

ア　言葉が表している意味内容が、その言葉のもつわかりやすさや肌理となって現れる。
イ　言葉に含まれる言いたいという気持ちが、その言葉のもつ感触や肌理となって現れる。
ウ　言葉のもつ整合性や合理的根拠が、その言葉を発するときの口調や声となって現れる。

〔　　〕

(3) ――線③「グレイな対応」とはここではどのような意味か。適当なものを選びなさい。

ア　おざなりではない、効果的な対応。
イ　慎重(しんちょう)ではない、短絡的な対応。
ウ　極端ではない、中間的な対応。

〔　　〕

(4) 筆者は、対話において何が重要だと述べているか。適当なものを選びなさい。

ア　相手を納得(なっとく)させるために整合性や合理的根拠をもつこと。
イ　相手にわかりやすい言葉で率直(そっちょく)に意味を伝えること。
ウ　相手からのメッセージに対してすぐに返信すること。
エ　相手の言葉の背景にあるものに想像力を向けること。

〔　　〕